

産まれたばかりのわが子を見るような、慈愛に満ちた表情を浮かべながら、天乃の精霊、神野悪五郎は天乃の頬に優しく触れる。

触れること自体が相手を壊してしまうのではないかと警戒しているような繊細な手つきはこそばゆくて、天乃は困ったように笑みを浮かべて

「くすぐったいわ」

「そういうものだ、気にするな」

「そういわれても……」

困った表情の天乃の頬を指でなぞり、手の平で受け止めて、柔肌をむにゆりと感じ取りながら……そっと顔を近づけると、キスをされると思ったのだろう。天乃は少し照れくささを感じさせる顔色で、目を瞑る。ほんのりと赤らんだ表情、きゅっと瞑られた瞼、かすかに震える唇

(……ああ、愛おしいとは。こうなのだろうな)

淫らな高揚感などなかった。ただただ、愛おしさだけがこみ上げてくる。齢十五の少女、雰囲気は大人びているが、容姿は子供の女の子。その唇にふわりと唇を重ねる。押さえつけるようなものではなく、このくらいで良いのだろうか、自分の思う最低限の力で触れる

「んっ」

「……………」

緊張感に乾いてしまった天乃の唇は柔らかくて軽く、少しだけ押し込めば簡単に押し潰せてしまいそうな弱々しさがあると悪五郎は感じて、すぐに離れる。

以前したキスとは感じるものが違っていたけれど、形容しがたいそれに考えを割くことなく、悪五郎は薄目を開ける天乃にまたキスをする。今度は少しだけ強く……みんながしているのと似たような感覚で。

「……………」

「っは……ん」

唇を重ねるたびに愛おしさが沸いてくる。口惜しさが滲み出てくる。失わせないために失うとはなんと理不尽なのだろうかと悪五郎は思う。だが……

(俺は妖怪だ。この時代にいるはずの無い、消された存在だ)

彼は妖怪で天乃は人間で。本来ならば出会うことすらなかったのだ。

出会えていたとしても、悪しき妖怪である悪五郎が天乃と恋仲になるなど普通ではありえなかった。もしかしたら、天乃が巫女として生贄として目の前に現れたかも知れないが、同様の力を持っているならば、悪五郎は為すすべなく退治されるだろう。あるいは……面倒見の良い天乃のことだから、改心させて末永く付き合ってくれるかもしれない。

(……馬鹿なことを。俺とお前はこの状況下だからこそその付き合いでしかない)

そうであって欲しいと、悪五郎は願う。でなければ、自分はなんて不運なのかと嘆かなければいけない。

別の場所で、別の状況で、同じように出会えたかもしれないという妄想など不要なのだ

「五郎くん……？」

天乃の優しい声が鼓膜を揺らす。小さくて綺麗で、儂い……目に見えない傷だらけの過去を持つ手が頬に触れる。じわりと広がる優しい温もりは子を思う母のような、人間が持つ愛情と呼ぶ不可視の概念的な不安定な代物のようで、悪五郎は思わず目頭が熱くなっているのを感じて、唇を真一文字に結ぶ

悪五郎の心の内を汲み取ったかのような、心配そうな表情。精霊を精霊と思わず異性として恋人としてみている瞳。別れを惜しんでいる表情それをしっかりと見定めて、頬をなぞり、後頭部へと手を回して抱き寄せながら唇を重ねる。キスをすれば顔が見えなくなっていて、口惜しいと思わずに済むから。

だから、悪五郎は天乃にキスをして、天乃の受けとめてくれる厚みのある柔らかい唇をゆっくりと押しつぶして、呼吸のために少しだけ離れては、またキスを重ねていく

触れ合うように、優しいキス

押しつぶすように、力強いキス

味わうように、ぱくりと啜える少し変わったキス

ゆっくりと熱が積みあがっていく。ゆっくりと唇に潤いが戻っていく。じわりじわりと。

離れると見える愛おしい少女の瞳が揺らぐ。潤いすぎて、今すぐにも溢れてしまいたいようなほどに……それは、悲しさか、喜びか——悪五郎は高揚感ゆえの瞳の揺らぎ。そう決め付けて、内心に燻る後悔の残滓を踏みつけ笑う

「馬鹿者め……」

「こんなときにまで、そんなこと言わなくても」

「俺はそういう妖怪だ。察せ」

頬から首筋、肩、腕、手へと流れるように天乃の肌をなぞり——肩からは衣服——そのまま太腿へと下ると、天乃の身体がピクリと動く

大丈夫か？と言いかけた悪五郎に、天乃は「少し驚いただけ」と、可愛らしく笑みを浮かべて、先を促す

天乃は性的な行為を何度か経験こそしているが、その全ては沙織達同性のみの経験であり自分がどうしたら良いのかと言うことに関してまったくの無知なのだ。

こんなことならば検索して調べておくべきだったのかも……と、天乃は今更悔いるが、男の子の好きに。

——そう、協力者である悪五郎の望むがままにされるのも悪くは無いだろうと思う。

(まだキスしかしてないけど……好きなのかしら)

「少し触るぞ。何かあったら言ってくれ……それ以外では止まらん」

「えっ……あ、う、うん」

天乃の少し驚いた様子に、悪五郎は数秒の間を置いてから砂城に触れるかのごとく天乃の足の側面を擦る。優しく、優しく、優しく。

脆く崩れるようなものではないと分かつてはいるが、それでも悪五郎の脳裏からその感覚は途切れることなく漏れ出す。しなやかに伸びた健康的な肉つきの足は、しかし少女らしい細さもあって、何も知らなければ襲い掛かっても不思議ではないほど魅力的なものだと悪五郎は思う。

（愛おしいからこそ悪事を働くこともある……だが、愛おしいからこそ……なによりも丁重になることもある）

足に触れるその手を悪五郎は内股に近づけること無く腹部にまで上らせて、揉むように撫でる。脂肪の少ない鍛え抜かれた腹部の感触。筋肉の固さ、脂肪の柔らかさ。人肌の温もり。どれをとっても素晴らしく、なお合わさって究極のそれは撫でるたびに動いて、呼吸のたびに膨らんで、何よりぬくもりのあるそれは触れていると堪らなく心地良い。だから、悪五郎は友奈達が好んで触れる理由を察して、笑みを浮かべる

「五郎くんまで……っ」

「娘共が触れる理由、俺も分かるぞ」

くすぐったそうに仄かな熱を吐き出す天乃に囁きかけて。服の中、薄いインナーの上から臍の窪みに指を埋めつつ脇腹へと手を伸ばす。鍛えられた肉付きとは裏腹に見た目相応の華奢さ感じる身体の厚み。一思いに挿んでみたいと思う悪五郎だが、今の身体ではそれを片手一つで包むことは出来ない。しかし、悪五郎は惜しいと思うドコロカ、満足気な笑みを浮かべる

「んっ……ちよっ……と」

くすぐったそうに呻く天乃の脇腹を手の平で包みながら素早く撫でてまた下へと下らせながら背中の方へと手を潜り込ませる。そして、子供を宿すために創られた無理の無い美しい曲線を描き、括れを形作っている腰の辺りで肌を掠めるように手を抜いて裾を捲りあげて腹部を曝け出させる

「はっ……は……ふ……んっ」

くすぐったさと心地よさに乱れた呼吸をする天乃のお腹の動きは愛らしくて、悪五郎は人差し指で円を描いて――

「きゃあっ!?!」

ぺろりと、臍の窪みの上半分から数センチ上までをひと舐めする。

「ふふっ」

「急に、そんなこと……っ」

可愛らしくあがった悲鳴に微笑みながら、脇腹を揉み解しつつ、腹部に頬を擦り付ける。微かな柔らかさと確かな力強さ。両立するそれは、確かな安心感があって

（少し……羨ましいな）

絶対に産まれてくるとは限らない。が、産まれて来るその子が羨ましいと悪五郎は思う。この腕に抱かれこの腹部に抱かれこの胸に包まれる。

そのなんと幸福なことかと悪五郎は天乃の服を少しずつ肌蹴させていくと、呼吸による胸

の膨らみが早くなっていく。

潤んだ瞳、艶かしい唇を一瞥した悪五郎は、その唇に唇を重ねながら、服の中で胸に触れる。ピクツツと天乃の身体が怯えたが、キスを続けて舌と舌を触れ合わせる。

(これは……)

「んっっあ……はふ……ん！っ」

キスの味が甘いなどと言うのは幻想だ。その一つ手前の食事の味。準備による歯磨きの味。所詮そんなものでしかないと思悪五郎は思うが、けれど、確かに甘みを感じた。

(好いた女の味か)

自分にとって極上であるからこそ、脳はそれを好ましいものへと作り変える。そう解釈した悪五郎は舌先と、胸に挑む自分の左手に神経を張り巡らせていく。

まず触れたのは、固い下着だった。おしゃれさを重視していないのだろう。大した装飾もない質素な感触の胸当てーブラジャーーを感じ取った悪五郎はその中央の器の繋ぎ目に留め具がないことを指先で確認し、そこからブラの中に滑り込ませて天乃の左胸に触れる。柔らかな窮屈感という性的に贅沢な感触。潜り込んだ指を軽く動かせば、張り付いたようにその豊満な柔肌は付いてきて。

「ん……っは……これか……」

「んっ、っはあ……はっ、んんっ」

キスを止めたことで、天乃の魅惑的な吐息は逃げ場を得て部屋に溶け込んでいく。胸に触れる左手の指一つ。それを動かすだけで、天乃がピクリと反応する。赤らめた顔色は艶かしく、熱の籠った吐息は淫靡で、潤う瞳は美しい。

悪五郎が手を引き抜くと、どうしたの？と言いたげに求める視線を向けてくる天乃から目を背けて、悪五郎は自分の手を見つめる。ほんの少ししかまだ触れていない、まだ一部の魅力しか味わえていない。だが、それは禁断の果実のように、悪五郎の情欲を刺激する。

世界を憎み滅ぼしたいと思う悪霊でさえ、ひとたび味わえば消滅を躊躇するかもしれないほどの……囚われの姫君とはよく言うものだと思悪五郎は笑う

「服を脱がすぞ」

「う、うん……」

「怖いかな？」

「大丈夫……五郎くんは優しいでしょう？」

妖艶な笑みを浮かべる天乃の全幅の信頼に、悪五郎は小さく笑って首を振る

(俺は妖怪だぞ……悪と名付く……そんな俺が、優しいと)

心の中でそう悪態をついた悪五郎は、天乃へと触れる手の弱弱しさに苦笑してそうだな……と感慨深そうに答える

最初はその力に誘われて、力尽くなくても自分のモノにしようと思ったのに。

その当初の望みが叶うこんな場面で、まるで見た目に適した子供のような力しか天乃に触れられない。力を入れようとしても入れられない

「俺は、お前には優しいさ」

「知ってる」

「……酷い女だよ」

皮肉を口にして、唇を一度触れ合わせてから天乃のシャツのボタンを上から一つずつ外していく。ゆっくり、味わうようにじっくりと。

プツリ、プツリ……と、小さく音を立てながらボタンが外れていき、胸元の窮屈な感覚が薄れていくに連れて気恥ずかしさが募る天乃は、今でも赤い顔をさらに赤くして悪五郎へと目を向ける。ドキドキと痛みさえ生み出すような強い鼓動がさらに強くなっていくのが苦しくて、脱がされていると強く印象付けられるそのゆったりとした脱衣がなんだか嫌で。

「ね、ねえ。もう少し早く……」

「時間はまだあるが」

分かっているのかいないのか、そう答える悪五郎は手を止めていて。

天乃は悲しいわけではないが泣きそうになる目をきゅっと瞑って顔を逸らす。真っ直ぐ向かい合えば、絶対に顔を見られてしまうから。

「は、恥ずかしいの……っ」

羞恥に頬を染めながら訴えてくる愛おしい少女の姿に悪五郎は笑みを浮かべながら、頬を撫でると、優しく下顎に手を添えてくいと、自分の方へと向き直らせて唇を重ねる

押し付けて、擦り合わさって……唇の殆ど全体が触れ合うような不器用なキス

「っは……」

「……………」

離ればちゅぷりと微かな音がして、互いの小さく熱を帯びた吐息が絡まっていく中、交錯する視線を逸らすことなく悪五郎はもう一度唇を重ねる

感じる柔らかさが心地良かった。触れ合う手と手が自然と結びついていく感覚が堪らなく嬉しかった。

「……もう少しだ」

キスをしながらもボタンを少しずつ外していた悪五郎は、最後の一つをゆっくりと、天乃が気づくような荒っぽさで外して目を向ける

「ん……………」

まだ素肌を晒しきったわけではないにも拘らず、悪五郎は数段飛び越えた天乃の性的な魅力を感じて、ごくりと喉を鳴らす。

シャツの上からでもある程度盛り上がりは見えていたが、内側はその比ではなかったのだ。トップスの強引な抑圧への抵抗を示すようにシワをつくり、なお抑え切れていない乳房は、呼吸のたびに布地にブラの形をくつきりと刻む

「やはり……お前はいい女だよ」

「身体だけ？」

「そうなら、こども苦労するものか」

天乃の問いに苦笑いを浮かべながら答えて、唇を重ねる。少しでも隙間が開くと小さく弾ける水音が耳に届く。そんないやらしく思える音を自覚しながら唇を重ね合わせたまま舌と舌を触れ合わせる。舌先を触れ合わせて、舌の裏と表をそれぞれチロリと舐めて捻るように絡めて、引き合わせる

「んっ……んくっ……ちゅ」

「っは……ふ」

ぬちゆりと音を立てながら離れると、悪五郎の口元からは糸が伝って……悪五郎はそれを追うようにまた天乃と唇を重ねて、左手で優しく腹部に触れる

「んうっ」

びくりと天乃が反応したが、構うことなく優しく愛撫していく。

力の入っていない腹部は筋肉のみの硬さしかないが、それさえも揉み解して柔らかくしようとしているかのように、手の平の付け根の部分で押し込み、小指側の側面でなで上げて、親指でぐにぐにと、玩ぶ。手の平に感じる熱は次第に温かみを増していき、天乃の口から時折漏れる心地良さそうな声に悪五郎は自分が昂ぶらされていくのを感じた

「っ……ん」

夏場のじつとりとした空気感に加えて、火照り始めている体は少しずつ汗をかき始めて、素肌に触れる悪五郎の手をじわりじわりと潤していくが、悪五郎は不快感を示さずに指先を脇腹へと滑らせてはマッサージをしているかのように手を添えて天乃の体を撫で回す。

(熱くなってきたな……)

天乃の身体も火照っているが、悪五郎の額にも汗は浮かんでいた。零れる吐息はもはや蒸気のように、下腹部に封印された淫行の主人公は、今か今かと出番を催促して存在を主張する——が、まだまだだ。

天乃の視線がぼんやりとしてきたのを感じ、悪五郎はトップスまでも胸元まで引き上げて胸を曝け出させる

「……もう少し何とかならなかったのか？」

「ごめん……」

安物だと一目で分かるような簡素な作りの下着は、それ自体はどちらかと言えば天乃の魅力に対してマイナスポイントになっていて、悪五郎は思わず悪態をつききながら、背中へと手を回してホックを外して——

「ほう……」

悪五郎は思わず、感嘆の声を漏らした。減点要素とさえ思った簡素な包みは、ただのカモフラージュだったのだ。ここには大したものはないと、騙そうとしているだけだったのだ。

悪五郎は、自分が盗賊なのであれば感激しただろうと思う。天乃の裸など幾度も見てきたが、しかし、自分の目の前であり自分がこれから触れるという経験は初めてで

この少年にとっては……初体験に他ならなくて。

真っ白と言っても過言ではない雪の肌。

ある意味不健康な白さは、天乃が穢れを受けるべくして受けているのではと思わせるほどで、その中央、その天辺には正しく紅一点と言わしめるぷくりと膨らんだ桃色の蕾が一つ

「あ、あんまり見ないで」

「何を恥らう必要がある……お前は美しい」

「っ……」

「白いからな。お前の紅化粧はすぐ分かる」

真っ赤になった天乃の頬に触れ、その熱を感じ取りながら固定し口付けをする

何をするにもまずはそれが入り口であるかのようにだと天乃は思っ、けれど、不快感も嫌悪感も無い。ねっとりとした侵入者は我が物顔で口腔で蠢き、頬の裏、舌先、舌の表と裏どこに触れるにも優しく、丁寧で自然と身体が受け入れてしまう。喉の置くまで入り込んでくるのではないかとどこかで思うのに、それでも構わないと……寧ろ自分から引き込んでより深く交わりたいと渴望さえしてしまうほどに、悪五郎のキスは心地よくて、ごくりと喉を鳴らすとどちらのものか判別付かない液体が身体の中に流れこんでいく

「んあ……は……ふ」

ねちゆりとした音が聞こえて、視界はぼんやりと揺れるのに悪五郎の存在だけははっきりと感じ取れる天乃がそうと手を伸ばすと、悪五郎は「どうした？」と言いながらその手を受け止めて、天乃の頭を優しく撫でて、頬に触れて親指で口元を拭う。

「先に進むぞ」

そう言った悪五郎は天乃の手を握ったまま、潤った唇を天乃の乳房に這わせて、肌理細かさゆえの心地の良い肌滑りに開いた唇でちゅう……つと吸う

「んう……あっはっ……」

「んっ」

「あ……っ」

清潔な香りに混じる、天乃と言う人間の肉体の匂いと滲む汗の微かな塩気

悪五郎は一心不乱に食してしまいそうになる衝動を押さえ込みながら、唇で啜えた部分を舌先でチロリと舐めると刺激の無い、優しい塩気が舌に広がってふわりと脳内に広がっていく

(まるで毒のようだ……いや、毒だな。俺のような存在には)

乳房のした部分からゆっくりと横に動き、たどり着いた胸の谷間に鼻を埋めて匂いを嗅ぐと「ちよつと……」と声が聞こえたが、悪五郎は気にすることなく後を追う唇と舌で味わい、顔を上げる

天乃は握られていない方の手を口元に押し当てて声を押し殺し、潤んだ瞳で見返してきていて、悪五郎は空いた手で天乃の純白の果実を包み込む

「っ……んっ」

掴むのでも、揉むのでもない。包み込む。優しく優しく。砂城など鼻で笑うほどの繊細な代物を扱うように。

触れる指先をその乳房は柔く受け止め、まるで飲み込もうとしているかのようにその形に歪み、そのたびに天乃の臉が閉じて嬌声が零れ落ちる

目で見て堪らない魅惑的な姿

耳で聞いて堪らない淫猥さを増す声

それらに魅了される悪五郎は手を握っていた手で天乃の口元に宛がわれた手を掴んで引き離すと、やや強引にキスをして、離れるのと同時に乳房を愛撫する

「っはっあっんっ！ んうー！」

「良い声だ」

「んくっ……んう！」

頭を撫でるような手つきで夢の詰まった柔い袋に触れながら、空いた手で喘ぎ声を漏らす天乃の頬をなぞり、そうっとキスをする。天乃もキスをされると分かっていたのだろう。いや、天乃自身がキスをしたかったのか触れた瞬間に、肉厚とはちがう故意に押し返すような力を悪五郎は唇に感じて

(まったく……)

受け入れるように唇を開くと、待ちかねていたかのように天乃の唇が割れて舌が伸び、入り込んでいく。

悪五郎も少年であり舌は言うほど大きくは無いが、天乃は一部を除いて全体的に悪五郎よりも小さな体をしているため、それはもはや侵入者と言うよりは迷い込んだ子羊

「んっ、んっ……」

「……………」

「んっ、んう！？」

迷える子羊を舌先で突き、こっちだよ。と誘導して一気に絡みつく。ぬるりとして、ざらりとして表面を掠め取ろうとするようなその感覚に呻く天乃の口元からはどちらかの唾液がいやらしく伝う。

そしてむにゆりと乳房が握り絞られ、ついでに触れただけのようにピンツッと乳頭が弾かれた瞬間に、一気に抵抗力がそがれて口腔も乳房も無防備に刺激を迸らせ、下腹部のじわりじわりと広がる熱が、砕け散ったコップの中の水が広がるように爆発的に広がっていく

「っは……」

目の前で悪五郎がゆっくりとはなれて自分の口元を拭う。天乃も自分の口元を拭おうとするが、体には力が上手く入らなくて、唾液はだらしなく伝って添えられた悪五郎の手にすくわれて天乃の唇に戻る

「はっ……はっ……」

まだ強烈な刺激を受けてこそいないが、身体の熱は十二分に煮え切って、空腹を訴えるようなきゆうきゆうとした感覚が下腹部から昇ってくるのを感じて、天乃はごくりと息を飲む

もはや鼻での呼吸は出来ない。運動をしているような荒っぽい吐息

汗のそれとは絶対に違う何かの染みた下着が微かな身動きと共に股に触れて……不快感を滲ませる

「五郎きゅーんっ！」

名前を呼ぼうとした瞬間、むき出しにされていた乳頭からぬらりとした尾を引く刺激が流れ込み、つうーつと線状の唾液が敏感になった乳房に弧を描く。それは決して冷たいものではないけれど、火照りきった体にとってはひんやりとじていて

「んっつ……あ……」

天乃は身悶えるような震えた声をあふれ出させながら体をビクビクと震わせる。何もされていない部分と糸が伝った部分を空気が撫でるたびに、その差を表そうとする神経は無駄な集中力を発揮して、呼吸をするたびに乱れる糸の感覚でさえ鮮明に分かってしまうような——そんな、状況で。

「……少しは敏感になっただろう？」

「あ……やつ……」

天乃の視界ギリギリのところ、悪五郎が舌を伸ばす。また舐められる。またゾワリとした刺激が来る。天乃は「待って……」と零すが、しかしそれとは逆に怯える身体は鼓動を早めて、汚れない真っ白な果肉を、命のように鮮やかな蕾を、扇情的に震わせて悪五郎を導く。据え膳どころの話ではない。

「待てぬよ」

そう零した悪五郎はぱくりと天乃の隆起した乳頭をくわえ込んで、唇で優しく甘噛みする。くにくにくと揉むように扱き、唇で挟んだまま顔を上げて引っ張っていくと——ちゅぽんつと、間の抜けた音がして乳房が淫らに揺れる。整っていない息を吐き出し、真っ赤な表情で目を瞑っている天乃を一瞥して、今度は力を抜いた歯で噛み付く。

「んっ！ つはっ……んんっ！」

「んちゅ……んく……ふ……ちゅ」

唇の端に隙間を作り、わざとらしく音を立てながら母乳を求めるように吸い上げ、歯で甘噛みしながら、綺麗な円形の乳輪を丸々唇に含んでもにゅもにゅと揉むようにしっつ、舌先で乳頭をツンツンと突き、ペロリと舐めて絡む。

「っは……んっ、んうっ……くはっ……はっ、あっつ……んっ、あっ」

ぬるりとしているかと思えば、ざざりとしている舌の感触、手入れをしない男の子らしく、潤いながらもカサついた唇の感触。複数の刺激は天乃の性的な弱点でもある胸を執拗に攻め続け、下腹部と同様に熱を帯びる乳房の中、乳腺は吸い上げられる感覚に母乳を出せない不快感を孕み、出せるようにと感覚を鋭敏にしてそれが股強い刺激となって天乃の脳を痺れさせ、快感に振るわせる。

「あっ、んんっ、くっ……んんうっ！」

絶え間なく嬌声があがる。悪五郎によって上げさせられる。もはや唇を噛んでも、手で押さえ込んでも決して隠し通せない快樂との協奏曲と化した声を、天乃は漏らしていく

「はっあ……あ……う」

そんな粘ついた吐息を漏らす天乃の唇には唾液が糸を引いて、悪五郎は迷わず唇を重ねると、じゅるりと吸い上げてごくりと飲む。

「あ……え？」

ぼんやりとした天乃の瞳が驚きに見開かれて、これ以上赤くなることはできなかったのか、代わりのように天乃の瞳からは羞恥の雫が流れ落ちていく。何をしているのと言いたげに動こうとした唇を塞ぐ、ねっとりとした淫靡さに満ち満ちた天乃の口腔、座する者のいない舌に悪五郎は舌を重ねて、押し付ける。ここは俺のものだと言うように。

「んっ、んあ……んうっ」

にゅるり、ねちゅり……と、普段なら嫌悪するような淫猥な水音を立てながら天乃と悪五郎は互いの舌を絡め合わせていく。少年の舌は友奈達ほどの柔らかな感触ではないが、それを補うほどに繊細で、丁寧に天乃の舌に触れる。あくまで暴君ではなく仁君であると主張するかのようなその触れ方に天乃は身を委ねる。天乃の口の中で分泌される唾液と、悪五郎の舌を伝って流れ込んでくる唾液が絡み合っただの奥へと流れ込むのを感じて、天乃がごくりと喉を鳴らすと、悪五郎は一旦離れて、「苦しかったか？」と問う。

「少しだけ……でも、平気」

「そうか」

二言、軽く。それだけ言葉をかかわした二人はまた唇を重ねて、ちゅぷりと離れて、舌を伸ばしあつて触れ合い、絡み合いながらキスをして、折り重なる。天乃の胸に悪五郎の体に触れる。まだ、服を着たままの少年の体が。

「っは……ん……脱いで」

「怖がるなよ？」

「大丈夫」

水泳の時くらいでしか生で異性の体を見たことの無い天乃に心配そうに声をかけながら、悪五郎はやや手荒に衣服を脱ぎ捨てて、裸体を晒す。下はまだ、下着を身に着けているが。悪五郎の体は外で快活に生きてきたかのような健康的な色をしていて、弱くはないが強くない標準的な運動系少年の肉つきをしていた。天乃はなんとなく、好奇心で悪五郎の方に触れる。固く厚く、熱い男の子の身体。そこから流れるように二の腕を滑って、手首、手と触れて握る。小さいけれど自分よりは大きな手。ずっとずっと力強い手。しかし、胸に触れるとき、頬を撫でるときそれは肌着のように優しかった。

(これが……男の子の身体)

そうつと少年の胸元に顔を当ててその熱を感じ、離れながら手で優しく擦る。筋肉ばかりで無駄な脂肪の少ない胸元。元からか、それとも火照っているからか、手よりもぬくもりのある胸を撫でて、腹部に触れる。腹筋が綺麗に割れていないのに筋肉は付いている。そんな中途半端な腹部は、悪五郎が力を入れると途端に強度を増していき、天乃は悪戯っぽく笑いながら脇腹を擦るが、しかし、悪五郎は余裕そうに笑って天乃の脇腹を指で突く

「ひやつ、あつ……んっ！」

押し付けた指をぐりぐりと動かしては、っーと腹の上を滑らせて、目を引く小さな窪みをぼりぼりと搔く悪五郎の反撃は心地よくて、しかし、下腹部はその穏やかな空気に似合わず、近い悪五郎の指が触れてくれるのを求めて、情欲を染み出させていく。

「天乃」

「ん……」

軽く唇を触れさせた悪五郎は、天乃の体の上に完全に跨ると、自分の下腹部が天乃に触れないように腰を浮かせながら手と手を握り合わせ、押し付けるように深いキスをする。側面を触れさせあい、表と裏を、裏と表を絡めあつて口腔の潤いが溶け合っていく中、悪五郎は糸の伸びる舌を延ばしたまま引き抜くと、粘つきのある細い糸が滴り、天乃の口の中へと垂れて途切れる。

「……優しくするが、痛かったら言ってくれ」

「う、うん……」

悪五郎の声に、天乃はより強く胸が弾んだのを感じてかすかに震えた声を返す。女の子のデリケートな部分、情欲のはけ口であり、受け皿であり、男の子にとっての神秘の泉。勇者部には何度も触れられ、見られたことのあるそれは、しかし、男の子に見せるのはやはり初めてで、それが性的な行為を目的のものだと思つと、途端に恥ずかしさが込み上げてくる。

(や、やだ……なんか……違う……)

恐怖がある。それゆえに緊張感がある。それなのに、天乃は自分の陰部から受けた悦楽の密度と期待を示す淫猥な蜜がより一層濃く流れ出ていくのを感じて、思う。

「はっ……はっ……あつ……ま、待って」

「んっ」

「ぬ、脱がさないで」

スカートの裾を捲り上げようとしていた悪五郎の手が止まって、スカートがひらりと旋風を起こして足に落ちる。それでも、痛いほどのドキドキは収まらない。それどころか、なぜ止めたのかと体は疼く。だが、天乃は唇を噛んで悪五郎を見る

「好きに、していいけど……まだ、だめ」

「怖いのか？」

「違うの。まだ……恥ずかしい」

「なるほど、承った」

天乃の眩くような答えに悪五郎は頷いて、スカートの上から天乃の下腹部に触れる。

「ひゃあつ！ あつ……んううっ！」

痺れるような快感が天乃の体の中を駆け巡り、一際大きな嬌声を上げた天乃は淫口から感じる悪五郎の指の温もりがかすかに動くだけで、荒れた吐息に混じった喘ぎ声を零す。

まだ触れただけだ。触れただけで痺れるような快感を感じたのならば、より深く触れられたらどうなってしまうのか……天乃はそんな恐怖を感じるのと共に、期待を感じて、息を呑む。悪五郎の中指が割れ目に沿って動くと、くぐもったじゅくりという音がショーツの中から零れだし、擦れ合う湧き水が淫靡なおいを発生させたのだろう、悪五郎は女の匂いを嗅ぎ取って、自分のセンサーがピクリと蠢いたのを感じて、小さく笑う。今すぐでも下着を剥ぎ取り、挿入したいという欲が湧き出してくるが、それは愛し合う行いではない。と、愛ゆえに拒絶して天乃の胸部を優しく愛撫する。柔肉が指を飲み込み、コリコリと密度のある隆起した突起が抵抗しては押し負けて潰され、そのたびに天乃の口からは愛しい声が零れ落ちてくる。

（この女は……天乃は俺をこんなにも受け入れてくれているんだぞ……急く必要などどこにある）

優しく天乃の胸を揉みしだきながら、スカート越しに感じる水漏れを起こしたわれ目のかすかな膨らみを撫でつつ割れ目の位置をしっかりと把握した悪五郎は、中指をくの字に曲げて緩く合わせつついるだけの陰部をなぞっていく

「あっんっ！ んんうっ！ あっ、はっん！ んあっ……あっかひゅっ」

悪五郎の指の動きが多少手馴れているのもそうだが、脱がさなかったブラと同様に安物ショーツゆえの起毛感が淫水によって潤い、擬似的な舌のようなものとなって敏感な皮膚をざらりと舐めて、快感に存在感を増した敏感な陰核が布に包まれて逃げ場無く擦られていく。その逆る悦楽の波は歯止めが利かずに体を震わせ、呼吸のままなら無い天乃は掠れた声を上げる。その瞬間に刺激は止んで、悪五郎の不安そうな声が響く

「大丈夫か？」

「ん……うん……みんなより、上手で……」

的確なのだ。刺激の強さも与え方も。東郷達も女の子というだけあって気持ち良くさせる方法を心得てはいるが、経験が圧倒的に足りないのだ。それゆえに天乃の経験を超えた快樂が、天乃の嬌声すら乗り越えて体を攻め立ててしまう。大丈夫だと天乃は言うが、しかし、悪五郎は同性同士の性交を経験しているとはいえ、まだ無垢で子供であることを忘れてはいけないと思っておして、頷く。

「んう……んむ」

「ん……」

仕切りなおすための軽いキスをしてから、深く合わせて舌を差込み、触れ合わせていく。怯えているわけではないのだろうが、抜けきらない恐怖心と緊張感を払拭するために、悪五郎はキスをしながら、慎重に天乃の下腹部に触れる。スカートの上から下腹部の少し上、子宮の外側にたるであろう部分を優しく撫でて、今から触れることを天乃の体に教えてから、一番敏感な部分を避けて股の付け根に触れる。じゅくりと動く布地に天乃の性感帯は巻き込まれて擦れるが、しかし、先ほどの直接的な接触よりも刺激は緩く優しく、天乃は心地良さそうな声を漏らしながら悪五郎のキスを受け入れて、舌を絡めていく

「あ……んっ……ちゅ」

くちゅり、ぴちゅり。唇と口腔の艶かしい音が内側で響いて耳元で囁かれる声よりも大きく深く頭の中に響く。それがまた愛欲を刺激する。淫欲を沸き立たせる。活火山のような下腹部の絶え間ない熱は、よりふっふつと煮え立って悪五郎の……少年ながらに男の子の大きさの手の熱と共鳴するように跳ねて溶け込んでいく。

(まるで、五郎くんの手が私そのものの手のように……)

悪五郎の手の温もり、傷つけることも驚かせることもしたくないという優しさに満ち満ちた愛撫を行うその感覚はゆっくりと皮膚に沁み込み、肉を懐柔して神聖なる器へとたどり着く。受け入れているのだと感じた。欲しがっているのだと感じた。男性が持つ異形の剣ではなく、悪五郎が与えてくれる快感を。

「んっ……んくっ」

「っふ……っは」

ゆっくりと離れる悪五郎の前で天乃の二色の瞳が彷徨い、ベッドの上に着いてきた天乃の手が悪五郎の頬に伸びて、天乃の顔が浮く。

「ん……っ」

「っ」

ふにゅりと、唇が重なった。

むにゅりと、柔肉が押し潰れた。

ぴちゅりと、離別を惜しむ声が飛ぶ。

長く自重を支えられなかった天乃の頭がベッドの上にポフリと落ちて、少し驚いた表情の悪五郎はおもむろにぺろりと唇を舐めると怪しく笑みを浮かべた。

「それでいい。俺の一方的な行為じゃないんだ。お前も……天乃もしたいようにしていい」

「ん……でも、これくらいしか、五郎くんには出来ないけど」

「構わんよ。自分でするのは違う。良い接吻だった」

天乃はそこまでじゃないでしょ……と否定を述べつつ眼を逸らしたが、悪五郎は褒め殺しにするつもりもなく、嘘をついたつもりもなかった。正直に心を打たれた。自分の好物を目の前に出されたかのように喉が潤い口の中がじつとりと興奮に疼いた。

悪五郎も細心の注意を払っているというだけあってキスはとても優しいものだ。だが、天乃の女の子であり、初心であり、無垢である少女のキスはそれ以上に繊細で優しく柔く、温もりと愛を感じられるキスだったのだ。

唇の一番厚みのある部分がまず重なり、そこから内側に広がるように唇は押し潰れて触れ合って、外側からゆっくりと並行するように離れて……ちゅぷりと水分が空気を含んで弾ける。そんなキス

悪五郎はそのお礼と言わんばかりに、むにゅりと胸を揉みつつ、小指をくの字に曲げて小さな突起をひっかけて引き倒し、通り過ぎた小指を戻して乳頭をツルツルとした爪で宥めてから一気に押し込む

「んっ、んう！っああっ」

「そろそろ馴染んできたか……?」

乳房と乳頭。性的な弱点を念入りにしかし大胆に責める悪五郎は天乃の嬌声を聞いて媚びるような甘く温い音へと変わり始めたのを感じて、頷く

下腹部を愛撫する手を少しだけ下にずらす。反応は変わらない。そしてもう少し下にずらすと敏感な性感帯に触れて

「っあん！」

びくんつと天乃の体が強く反応し、シミを作って透け始めてさえいる下着は超過する雨量に耐えかねて漏水を始めて悪五郎の指を浸していく。それと合わさるようにして、淫猥な愛欲に塗れた匂いが部屋に広まっていく。さつきまでよりも強く。

悪五郎はごくりと喉を鳴らすと、さらに手を下に移動させて天乃の割れ目を人差し指で擦る。少し前に零した淫行の祝杯はまだ冷えを知らずぬるりと……ねっとり……悪五郎の指にまとわりついて

「っあっあっ……んっ、っはっ……っ」

そのたびに天乃の口から気持ちよさそうな声が零れ出す。唾を飲むことさえできないのだろう口元からは細く涎が流れ出していて、悪五郎がそれをぺろりと舐めると天乃は無駄に堪えようと閉じていた瞳を開く。

琥珀のように美しい瞳

ルビーの原石のような瞳

悪五郎はそれと真っ直ぐ向き合い、唇を重ねてぬちゅりという淫らな音を立てながら舌を絡める。ぬるりと絡む舌。まるでそれが自分たちの手であるかのようにどちらからともなく絡み、交わり、深く根付くようなキスをする。そして

「んくっあ……んちゅ……」

中指の第一関節程度の間隔をさするだけだった指を曲げて——クイツと、引く。天乃の淫欲に浸ってふやけた敏感な陰核を布越しの爪先で削る

「んむうううっ！」

キスの中に絶叫が混じる。悦楽に飛び込んだ心の叫び。じわりじわりと染み出していくだけだった天乃の性水は弾けたようにクロツチ部分へと放たれて悪五郎の指がぬちゅりとした粘り気のある液体に濡れて……

「っは……」

「はっ、はっはっあ……う……んんっ！」

唇を離すと、荒々しい乱れた呼吸を漏らす天乃は一瞬つばを飲み込んだだけでまたビクツと体を震わせて押し殺した喘ぎ声を上げる。そのあふれ出した情欲の雫はまた、悪五郎の指を浸す。

「……………」

濡れた指と指を擦り合わせて離すと、間延びするいやらしい水音が奏でられて、肉欲をそそる匂いがより強く感じられる。誰だったか……それを口に含んでいる姿を思い出した悪五郎はほとんど無意識にその人差し指をへろりと舐める。

「な、なに……っ」

刺激があるときまではいかないほどの薄い酸味と塩っぱさがねっとり味覚に張り付いてふわっと淫香が鼻を抜けて脳にまで浸透していく。料理として美味だとは言えないが、しかし癖になる味わいだと思五郎は思う。接吻は好いた女の味。ならばこの液体はなんなのだろう。溶け出したように流れ出てくるこの不可思議な湧き水は……なんなのだろう。悪五郎はそう考えて、ふと笑う。同じだ。考えるまでも無い。それもまた恋焦がれた愛おしい女の味だ

「悪くない」

「っ……ばっっ」

「もう少し早く分かっていれば、晩酌にでもしたのだがな」

「変な事……言わないで」

「俺は好きだぞ」

羞恥心が堤防を越え、無駄に両手で顔を覆う天乃を見つめながら、悪五郎は微笑む。何度か同性での成功をしているというにも拘らず、相変わらず初心で無垢で清廉で潔白で、染み一つ無く汚れのない乙女。

（触れなければ知れないこともある……そして見える一つ、聞こえる一つ、知る一つその全てが恋しく愛おしいのだ。良薬は口に苦しと言うが。中々どうして理解が出来ないわけだ）

目の前で純白を薄紅色に染め上げる美麗な人間の少女を優しく眺めて温かく頭を撫でた悪五郎は、再び下腹部に手を宛がい、拭うような落ち着いた所作で撫で解していく。陰部の割れ目が微かにくぷりと開いては閉じてくちゅりと魅惑的な誘いが空気に溶け込んでいく。激しい運動も強い刺激もまだなにもしていないが、動悸の激しい悪五郎は落ち着くと一息ついて天乃の乳房に口付けする。刺激の強い反り立った乳頭のすぐ傍、しかしながら離れた位置に。その微かなズレが天乃を誘惑するのだ。どうしてこっちじゃないのか、どうして一番気持ち良くなれる場所にしてくれないのか……と。天乃は豊満な実りが欲求に疼くのを感じて、体が震えるのを感じて、息を呑んで顔を覆う手の隙間からこっそりと悪五郎の様子を伺う。

「……どうした？」

「っ……」

「何も無いなら先に進むが」

悪五郎はそう嘯いて天乃を見つめる。天乃がなにを求めているのかなど、悪五郎には手に取るように分かるが、しかしあえて問う。

羞恥心と欲求の葛藤に苛まれて唇を噛む天乃の姿が腫に焼きつく。愛おしい女の恥ずかしい一面が脳裏に染みこむ。天乃は顔を覆う手を離して上目遣いに悪五郎を見て小さく口を開くが、零れ出るのは吐息ばかり。言いたくても言えない。言いたくない。それゆえの滞感

「……意地悪」

やっとなってきたのはそんな眩き。悪五郎が分かっているのだと分かっているからこそその罵倒……だが、悪五郎は要求よりもそれが来ることを望んでいたのだろう。悪戯な——それこそ天乃が言う意地悪な——笑みを浮かべて糸引く熱の籠った唇で天乃の胸元、淫猥な出力電源を啜え込む。

「あつんっ……!!」

天乃のくぐもった声を合図に、唇ではなく歯で少しだけ強く乳頭に齧りつく。奥の奥に眠った旨味までもしやぶりつくそうとしているかのように、唾液を馴染ませるように舌を這わせて解し、蕩けさせながらぐにゅりと揉み潰す。

「んつくっ……っは……あつあんうっ」

ぴちゅり、ぺちゅりと下品な音を立てながら体が舐まれていくのに、声が抑えきれない。堪えても、堪えても漏れ出す音は反響を重ねて大きく広がっていく。口元に宛がった手の甲にはべったりと飲みきれない涎がまとわりついて。

「ふあっ、あんっ!」

左の胸がぬらりとした蒸し暑い責め苦に弄ばれる中、右の胸までもが驚掴みにされて天乃は思わずひときわ強い喘ぎ声を上げる。怪我をしない程度の優しさしかない乱暴な掴み方けれど確かな愛と性欲の手は熱を覚まさせることなく揉みしだく。小指から親指へと流れるように絞り上げて手の平で掠める程度のじれったい快感を乳頭から乳腺へと流し込まれて……

「んっ……んっ……あつはっあ……んうっ」

快感が逆り、動かせない足の付け根でじゅくりじゅくりと期待が集って声が零れ落ちて体の奥底の熱量が再び激しく燃え上がっていく。子宮から脳まで真っ直ぐに貫く何かが少しずつ引つ張り出されていくような感覚だった。引き抜かれれば放心すると確信できるような気の抜け方が徐々に徐々に幅を広げていく。

「んっあつふ……んっあつあつん——」

しかし、その最高の流れに乗った悦楽は志半ばに倒れ込んで熱が引く。びちゃびちゃに濡れ、ぷくりと膨らんだ桃色の乳頭が天乃の視界に移り、そこから伸びる糸を辿れば悪五郎の顔が見える。

(え……な、なんで……)

天乃の心の中で呻き声が零れた。快樂の溜まり場、情欲のはけ口。久遠天乃という“処女”の切ない悲鳴がぎゅつと下腹部を締め付ける

「なんで……やめちゃうの……?」

天乃が思わず不満を溢すと、悪五郎は首を横に振って天乃の口元を拭うと濡れた天乃の手に手を重ねて、天乃を真っ直ぐ見る。

「お前の声を聞かせてくれ」

「っ……それは」

「恥ずかしながらに啼いてくれ。俺は聞きたい」

「……う」

悪五郎は声を我慢しないでくれというのだ。淫欲に浸り乱れた声。自分のものとは思えないような甘えた声。女であることを強く印象付ける快樂に震える感情の籠った音色を。天乃は息を飲んで、じわりじわりとそこに心臓があるかの如く熱を発する下腹部に手を宛がう。頭でうただと考えていても体は正直なのだ。悪五郎に気持ちよくしてほしい。男の子との最初で最後のえっちなことだから……今までにない快樂を、喜びを。果てへの探求を。

「分かった……我慢するのは止める。けど、無意識にしちゃうのは許して」

「その時はこじ開けてやるさ」

自信有り気に宣言した悪五郎は天乃の小さな唇に唇を重ねてじゆるじゆると唾液を啜る。

甘く恋しくなるようなそれでのどを潤し身体の熱量を上重ねて右手で白桃のような柔肉を掴むと、伸ばした舌で乳頭を舐めて……左手で天乃の下腹部を弄る。

「あっ……はっ……はっ……あっんうっ、あっ」

乾いた音などしない、ぬちゅりぬちゅりという粘ついた音、ぴちゅり、ぺちゅりと水泡の弾ける音が部屋に響き、天乃の淫靡な声がそれに溶け込んでいく。裂け目の合わせが一本の指に抑え込まれる持続的な快感に天乃の体はビクビクと震えて。

(あつく、くる……また、大きい……)

一つ一つが大きくはなくても蓄積していくその淫らなエネルギーが下腹部で大きく膨れ上がったいくのを感じて、天乃は腰が浮き上がりそうな衝動を覚えて……

「んっあっやっ……あっあんっ……あっご、ごろうくっ」

「——そろそろか」

「あああああああっ！」

天乃が悪五郎の名前を呼び、ぎゅっと手を掴んだ瞬間、クイツと引き上がった指が上手いタイミングで陰核を弾き飛ばして、導火線を飛び越えた火種は爆薬と結びついて大爆発を起こし——天乃は大きな声を上げて体をのけぞらせる。身体が揺れる。身体が震える。開いた口が塞がらず飲めない唾液が零れる。熱を放出したはずの下腹部がじつとりと熱くなって腹部が呼吸にへこむ。すっかり水浸しになった下着とスカートはもはや不快でしかなくて。悪五郎もそれに気づいたのだろう。「脱がすぞ」と声をかけてファスナーを下ろしてスカートを取り、ショーツに手をかける。天乃の抵抗はなく、むしろ脱がしやすいうように少しだけ体が浮いてさえいて……悪五郎は小さく笑って濡れたタオルのような下着を脱がした

「これは……そそるな」

悪五郎は情欲の籠ったのんびりとした感嘆の声を溢す。淫水に塗れててかてかと艶がかり、まだ成長の乏しい陰毛を薄く添えられただけの陰部。端に軽く触れれば開く扉はにちゃりといやらしい音を立てて、白い柔肉の内側から色鮮やかな陰唇が顔を覗かせる。その整った造形は美しく、しかしまだ発育の未熟さを感じさせる小ささが可愛らしい。両者を両立させるその様はまさしく神秘的だと悪五郎は思つて……

「そんな、まじまじと見ないで」

「……見惚れてな」

「何言つてるのよ……もう」

天乃の呻くような恥ずかしさからの一言に悪五郎は笑いながら溢して、自分の手を動かす。本当なら、目の前に出された高級食材にも吸い付いて贅沢な花蜜を啜りたい気持ちではあつたが、それを受け入れられる人と受け入れられない人とがいる。終幕のキスをするのなら尚更。だから、悪五郎は細心の注意を払うべく利き手を用いて割れ目に触れる

「んっ！」

ほんの少し触れただけで天乃の甘い声が聞こえた悪五郎は、そこから触れた指を上下に何度かスライドさせて指の熱を天乃の体に覚えさせていく。これから入り込んでいくことをゆつくりとじっくりと説得させていく

「んう、あつ……はっ……はあ……んっ」

ずつと聞いていた声。少女を女たらしめる淫靡な幽香……いや、誘香というべき空気を肺に溜め込み、悪五郎は「少しだけだからな」と天乃に囁きながら、中指の第一関節の半分ほどを膣口に挿入する。

「あつ……くう……」

生暖かく柔らかな圧迫感。ブラに押し込まれた胸の柔壁とはまた違ったその窮屈な感覚に悪五郎は指先に神経を集中させていく。触られた経験も挿入された経験もある情欲の挿入管、希望の排出口は、しかし、まだ少女の指ほどの広がりしかないのだ。数回悦楽の果てにたどり着いてほぐれたと言つてもまだまだ処女で。膣口の縁を指の微かな皺で削るように、短い挿入を繰り返す。にちゅり、ねちゃり、くちゅり……淫らな音が響き、半分ほど抑え込まれた嬌声に絡まって部屋に満ちていく。

「んっ、んっ……あつっ、はっはう……んんっ」

「天乃……」

そつと頬に左手を添えて名前を呼ぶと、天乃は応えるように唇をぬらりと開く、淫欲に充てられて湿度を増した口腔からこぼれ出る吐息を受け止めて唇を重ねて、舌を絡める。ぬるぬるした舌を絡め合い、ねっとりとした粘液を飲み下す、ぴちゃり、ぴちゅりという響きが心地よく耳に届いて、天乃の体の熱さと快感による振動が密着する乳房から悪五郎へと伝わっていく。

「んうう……あつはあつ……はあつ……」

「っふ……んく」

溜まったつばを飲み込み、口元から唾液を溢れさせながら乱れた呼吸に必死な天乃を見つめて、膣口に触れる指に人差し指を含む。にちゃあつと粘り強い水音を鳴らす淫口は挟み込む圧迫感ある抵抗を感じさせたが、解れた分容易に受け容れていく。じゅるりという指を包み込んでいく感覚が性欲の銃身を包み込んでくれるのかと思うと、ドキリと期待が膨らむ悪五郎は喉を鳴らして

第一関節まで入りこませたスパイに扉を開かせていく。口とは違う明らかな淫猥さを含んだ熱気と匂いが辺りにあふれ出ていく。桃色のまだ穢れを一つとして知らない妖艶な輝きを放つ膣口は二本の指を咥え込んでなお、まだ少し余裕があるようにも見える。当然だ、いずれ指など比にもならないほどの大きな夢を孕んで、未来を産み落とす場所なのだから……しかしだからと言って、今産めば裂けるのは不可避だろう。

「もう少し、気持ちよくするからな……もしも痛かったら遠慮なく言うんだぞ」

「ん……」

天乃の頭を優しく撫でながら、しっかりと注意する。天乃はまだ処女ゆえに内側の膜が裂ける痛みを伴うのは必然だ。もちろん、過度な運動によるある意味で自然な破瓜を経験しているのならばその苦しみも多少は軽減してくれるのだろうか……。

「いくぞ」

軽く声をかけて、挿入した中指をゆつくりと上に向かわせ、狭い膣内の天井に優しく触れる。触れるたびに、擦るたびにぐもった媚声を溢れさせる少女はまるで淫靡な楽器のようで、気分をさらに高揚させる。美しいのだ。愛らしいのだ。声も、肉体も、匂いも、瞳も、何もかもが。

「んうう！」

そして慎重な探索を行う指先が集中していなければ気づかないほどの微かな膨らみを滑った瞬間、天乃は艶やかな声を上げて体をビクンッと跳ねさせる。

（このあたりか……しかし、まだ未成熟か。膨らみは薄いな）

そんな感想を抱く悪五郎は、びしゅりと淫らな噴水を手の平に受けるとそれに弾かれるように指を引き抜く。その動作だけでも、天乃はいやらしい吐息を漏らして。

「あつ……はっ……はあつはあつ……んく……」

だらりとベッドに寝そべる天乃を一瞥し、ねちゃりとした糸を垂らす自分の指へと目を向けた悪五郎はそれをわざと、天乃の瞳に映す。

「淫猥だな……本当。糸を引くのにもここまで粘つきもしないのがまた……お前らしい」

「……五郎くんの手がいやらしいからよ」

「違うない……」

天乃は元からいやらしい体つきをしていたが、勇者部と付き合い始め、性的な交わりを行っていくことで纏う雰囲気までもが情欲を振るわせてくれるようになってきているのだが

……悪五郎はそれを言葉にせず、苦笑いを浮かべて、唇を重ねる。ほんの軽い唇同士のみすではあったが、ねちゆりとした水音が響いて天乃と悪五郎は気恥ずかしそうに笑う

「んっ……あっ……あんっ！」

くちゆり、くちゆりと音を立てる膣口を弄り、たわわに震える乳房に悪五郎はキスをする。舌の柔らかく粘ついたざらりとし刺激が胸から這い上がり、下腹部の隔壁のない強烈な刺激と絡まって快楽神経を強く痺れさせて、無意識に嬌声があふれ出る。甘さと快感に歓喜する淫らさを混ぜ込まれたあまり出したくはない声……まるでもっとして欲しいと求めているようで、自分が淫欲に塗れていくようで少しばかり怖くて。けれどそれを悪五郎は優しく包み込んでくれるのだ。受け止めて、愛してくれるのだ。だから、拒もうとするものは何一つない。怖くても、不安でも、身体は悪五郎のために開く。

（体が、お腹の中が五郎くんを求めているのが分かる……）

神聖な器までの道のりで寄り道をする悪五郎の指が中の一番弱い部分に触れるたびに、大きな声が零れてしまう。胸を愛撫されるのも気持ちがいいし、さっきまでのこそばゆさも絡む下腹部の愛撫も気持ち良かった……けれど、それらがあくまでも前戯でしかなかったのだと、天乃は思い知らされていく

「はあっはっ……あっんっ……んうっ！っあっ！」

体の中の水分が絶え間なく流し出されていく、奪い取られていく。熱を流し込み熱を奪い去る。呼吸がさらに覚束無くなっていく……けれど、それを気にするよりも感じる心地よさに体が悦んでしまう。どうにかなくなってしまいたいようで嫌だと思ふ反面、止めて欲しくないという気持ちが湧き出してくる。

「あっ……んっ、んう……」

膣をかき乱すような指が開けてはいけない箱を少しずつ開けようとしているのを感じて、天乃は悪五郎の腕を掴む。ねちやりぬちゆり、自分の体から発せられる淫靡な音楽を聴きながら、天乃は覚悟を決めて目を瞑る。その瞬間、悪五郎の指がくいと曲がり、敏感な部分を貫くのと同時に溜まりに溜まった熱量が放出されるような爆発的な刺激が瞬間的に脳へと流れ込んできて、体が浮く。心が浮く。そんな不思議な浮遊感を感じて――

「あああああっ！！」

悪五郎へと容赦なく淫水を噴出した天乃は体を激しく震わせて、深い呼吸を繰り返す。呼吸をするだけでも、まだ膣内に残る悪五郎の指が膣壁に触れて流れ込む刺激に喘ぎ声と淫行の湧き水が流れ出していく。

（もうだめ……もう……）

頭がぼんやりとして、考える力が損なわれていく。けれど、耳元の声ははっきりと聞こえるし、理解が出来る

「……そろそろ、挿入するからな」

「んう……あっ……はーっ、はあ……はあ……んっ」

声にならない声で答え首肯すると、入り込んでいた指がくちゆりと音を立てて抜けていく

(……さて、そろそろか)

悲しさを心のうちに吐き出しながら下着を脱ぎ、猛りきった少年の大きさでしかない性具をさらけ出した悪五郎は、本来の自分の大きさととは全く違うそれを一瞥して、天乃の膣口に宛がう。元々熱くなっていた淫欲の射出機だが、触れるべき場所に触れた途端さらに滾って熱を帯び、痛みを伴うほどに怒張する。過去、悪五郎として女を抱いた経験のある悪五郎だがこれほどの間隔を覚えたのは初めてだと感嘆しつつ、ゆっくと天乃の体を貫いていく。粘つきのある淫靡な音を響かせながら、ゆっくと男としての欲が包み込まれていく。そのたびに天乃の声からは苦しそうな声が零れるが、悪五郎もまた、押し伸ばされていく皮と膣道の窮屈さに呻く。

「んっ……くぁ……」

「はっ……はぁ……っ」

ぐちゆり、にちゆり、そんな音を立てながらゆっくと確実に挿入していくと、まとわりつくような柔らかい抵抗ではなく、正面からの阻むような抵抗感を感じて悪五郎は天乃にキスをして

「貰うぞ？ 良いか？」

「ん……うん……貰って」

「少し痛む。キスをしていた方が良いか？」

悪五郎の優しい問いに、天乃は涙をこぼしながら笑みを浮かべて首を振る。キスをしながらというのは安心できるけれど、それは唇や舌を噛んだりしてしまう可能性があるから。だから、天乃は悪五郎の頬に触れて

「頭を……撫でて」

「……可愛い女だよ。まったく」

「嫌い？」

「大好物だ……心から愛せるほどに」

ありがとう。と呟く天乃の頭を優しく撫でてあげると、天乃はほほ笑むように目を瞑って悪五郎は頭を抱くように撫でながらより深く下腹部を圧迫して——男ならば誰もが欲するのであるうゴールテープを貫く。だが、これは終わりではない。これは始まりだ。

「っ……う」

喪失の痛みには震える天乃の体を優しく抱く。膣内の異物感と痛みをゆっくと馴染ませ融かして頭を撫でていた手で頬を撫でて唇に唇を触れさせ、離れてまた重ねて……ねっとなりと舌を絡める。膣の痛みと並行して蕩けるようなキスの心地よさを与える

「んっ……んちゅ……んうっ」

「んく……ん……っは……」

何度も、キスをする。悪五郎から求めて、天乃から求められて。二人は繋がったまま唇の触れ合いに興じて数秒か数分……ふやけた視線を交わし合い、天乃が頷いたのを合図にして、悪五郎がゆっくと腰を動かす。

「んっ……んうっ」

まずはぐにゆりと引き抜いて、また刺し込む。天乃の腰のあたりを掴み少しだけ持ち上げて、天乃の事を確実に気持ちよく出来るようにと、指で責めていた微かな膨らみに

愛の伝達棒が触れるようにと挿入する。ずっと気持ちよくさせるばかりだった悪五郎の生暖かい淫靡な抱擁を受ける射出機は待ちに待った心地よさを受けて今にでも打ち漏らしてしまいたいようで、悪五郎は思わず苦笑いを浮かべる。自分以外に抱くことが出来る男がいるのだとしたら、それはきつと幸福に包まれるだろう。と。もちろん、もうすでに結婚を決めた人間が複数いるのだからそんなことは不可能だろうが。

「んっ……あっはあっ……はっあっ……んんっ」

強く腰を打ち付けたり、早く挿入することもなく、慎重に陰部を触れ合わせていく。ぴちゅり、ぬちゅり、ぱちゅりとさつきまでとは違う触れ合い弾ける水音がこだまする。そのたびに天乃の喘ぎ声と悪五郎の心地よさに呻く声が重なる。

「んっ、あっ……はあっ……あんっんんっ！」

心地よさに呻き、絶え間なく蜜を流し出す天乃が体を震わせると、快楽の果てにたどり着き、溢れた悦楽のしぶきが噴き出していく。そして天乃の手が悪五郎の腕を掴むと、悪五郎は天乃の足を掴み自分の屈んで低くなった肩に乗せて天乃の方へと前かがみになっていく。足が広がるのと同時に割れ目がきつく締まって、それがまた心地よく悪五郎は呻いて天乃の両脇に手をつき、挿入を繰り返しながら唇を重ねる。

「あっ、んっ……んっんちゅ……んっんあっ……」

唇を離すと、ねっとりとした吐息が天乃の口からあふれ出し、求めるような瞳が悪五郎を見る。それが切なくて、惜しくて悪五郎は思わずキスを重ねていく。挿入しながら、何度も何度も。深く入り込んでいく。

(見つけた……たどり着いた)

もう一つの自分が天乃のもっとも奥深く、子宮口に触れたのを感じて悪五郎は天乃の頬を撫でる。天乃の膣口から出ていく粘ついた液は薄まった破瓜の証明に染まっていく。もう痛みなど完全に感じないだろう天乃は妖艶な表情を浮かべて……悪五郎は自身の弾倉が暴発寸前にまで溜まったのを感じ取って「天乃」と名前を呼ぶ。

「俺もそろそろだ……流し込むぞ」

「んっ……うん……良いよ……五郎くん……っ」

こういう時に求めてくれる天乃の、女としての圧倒的な魅力に悪五郎は感謝しつつ深く深く挿入しながら天乃とキスをする。ぬちゃりといやらしい音を立てる性的な衝突が少しだけ強くなって、天乃と悪五郎は互いに溜まった心地よさが膨れ上がっていくのを感じる。

——そして、唇同士に触れ合いに合わさるように膣内で子宮口と陰茎が繋がって、共有された快感が激しく逆り駆け巡る。キスする中で絶叫にも似た快感の悦びが互いに吹き込まれていく。腕はいつの間にか互いの体を抱き合っていて……

(素晴らしいな……言葉もない)

悪五郎は自分の力の流出を感じながら、天乃の肉体的な心地よさの産物を心の中で褒め称えて、笑みを浮かべつつ天乃とのキスを終えて。

(男の子だから……じゃない、五郎くんだから……)

自分のことをこれまでになく気持ちよくさせてくれた悪五郎の顔をぼんやりとして揺らぐ視界で捉える天乃は胎内に入ってくる力を確かに感じて……悪五郎の気配が薄れていくのを感じた。感じ取れてしまった。それに合わせて自分の中に入る力が色濃くなっていくのを感じる

「……五郎くん」

「泣くな。元々そういう話だっただろう？ 覚悟はしていたはずだ」

「でも……」

「最期に良い思いが出来た。お前を愛する小娘共の誰にもできない貴重な経験だ。うらやましがるぞ、妬まれるかもしれない……ふっ、後にも先にも俺のみの経験だ。俺の一人勝ちで……そうだな、勝ち逃げとさせて貰おう」

悪五郎は勝ち誇った笑みを浮かべながら、言う。天乃の悲しみを払い除けるように言葉で畳みかける。しかし、涙をこぼす天乃の頬には雫が落ちる

(……おいおい、冗談はよせ)

驚くことはなく、ただ自分自身に呆れて言う悪五郎の頬を天乃の小さく優しい手が撫でる

「良いの……良いのよ……五郎くん」

「なにが良いものか……なにが、俺は、これでは……」

「どちらにしても私は悲しいもの……だったら、五郎くんも正直になってくれた方が良い」
「くっ……」

目を瞑ると、籠っていた潤いが流れ出していくのを感じる。覚悟をしても、分かっただけでも、悲しいものは悲しいのだ、嫌なことは嫌なのだ。ただただ我慢をしているだけで、それ自体の喪失は決していない。

「最初はお前の力だけが目当てだった。俺の力を注ぎ、孕ませて更なる力を得る道具として思っていないかった」

「……知ってる」

「でも、お前はそんな俺を切らなかつた。少しずつ確かに接してくれた。人間の温もりを教えてくれた」

悪五郎は少しずつ体に力が入らなくなっていくのを感じて、天乃の頬に触れる。適当に触れても優しい程度の力だが、心を込めて優しく触れて。その手に、天乃も手を重ねる。受け入れるように、包み込む

「誰にでも優しい無謀さは少し怖いが……だが、それがお前の良さだと俺は思う。だけど……これからは程々にしてくれ。お前は普通の不自由な女になるのだから」

「……うん」

天乃の信頼できない切なく悲し気な答えに、悪五郎は苦笑いを浮かべて首を振る。もつといろいろ言いたいことはある、なのにもう時間はないと感じるから。それなのに、こんな説教染みたことを言っているから。

「……俺はお前を、天乃を愛しているぞ。たとえこの身が減んだとしても」

「私も……五郎くんのこと好きよ。意地悪でちよっぴり怖いけど。でも、本当は優しい五郎くんが好き」

「幸せになれ。自分だけを優先しろなんて呪いは言わん。だが、お前が望む幸せを勝ち取って生きろ」

「頑張る……」

「お前の過去の努力が、犠牲が、今のお前の助けになる。お前の願いを叶えてくれる。きつただ」

小さくも大きな手が頭を撫でる。頬を撫でる。そして、だんだんと力が弱くなっていく

「信じてやれ、託してやれ。お前が作り上げた今はきつと、お前の望みを叶えるだけの力があるはずだから」

「……でも、悩むかもしれない。迷うかもしれない。みんなを失いたくないから」

悲しそうに切なそうに、嘘をつかずに本心を語る天乃に、悪五郎は「それでいい」と笑いながら答えて、額と額を軽くくっつけて

「それでこそ、久遠天乃という女だ。俺が惚れて、俺が生かすべきと見込んだ女だ」

「……………」

「本心に嘘ついた決断はするな。悩んで迷って、自分自身を説得した決断こそが幸せになれる一番の遠回りなのだから」

悪五郎の優しさに包まれる天乃、天乃の優しさに包まれる悪五郎。二人は互いに繋がりを持ったまま、互いの頬に手を添えて唇を重ねる。ふわりとした接触はほんの一瞬で……消失する。

「……ありがとう」

部屋に残されたたった一人の少女は、抱かれていた体がベッドに落ち、どろりとした少年の生きた証が膾口からわずかにこぼれ出ていくのを感じて、指ですくうと口に含む。なんとなく、ただ垂れ流すのは嫌だと思って……

「五郎くんの味がする……なんて……」

目を覆うように腕を置いて……嗚咽を溢す。今だけ、今だけは泣くことを許して欲しいと……天乃は誰かに言うわけでも無く思い下腹部を撫でる。出来て欲しい、生まれて欲しい。元気で明るい希望が産まれて欲しいと……天乃は願いを込めて、撫でた